In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	都市空間をいかに記述するか：「見る者」か「遊歩者」か, それとも?
Author	菅野 拓(旧姓 中村)
Citation	都市文化研究. 13 巻, p.57-68.
Issue Date	2011-03
ISSN	1348-3293
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科 ：都市文化研究センター
Description	研究ノート
DOI	10.24544/ocu.20171213-096

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

都市文化研究　Studies in Urban Cultures
Vol. 13，57-68頁，2011

◇研究ノート◇

都市空間をいかに記述するか

――「見る者」か「遊歩者」か，それとも？――

菅　野　　拓（旧姓 中村）

◆要　旨

1980年代末の「空間論的転回」以降，種々の空間論が出現したが，その理論を適用して都市空間を記述したモノグラフ・研究（「新しい都市空間誌」と呼ぶ）はわずかである。新しい都市空間誌記述の困難な理由を問い，都市空間誌を記述するための理論構築を展望することが本論の目的である。

分析対象として取り上げる「新しい都市空間誌」はハーヴェイとソジャの著作である。前者の都市空間誌は「マクロ」な資本主義的生産様式の分析を現実世界に応用したうえで，資本の直接の影響を主軸に人々の日常生活として都市を描くものの，法・制度・慣習・人々の抵抗などを扱うフレームワークが存在していない。後者の都市空間誌は，動因としての資本と結果としての建造環境を記述するマクロな視点と主体の経験を記述するミクロな視点のどちらか一方を優先させずに両方を並列して都市空間を記述するものの，マクロ・ミクロを関係付けながら扱いうるフレームワークが存在していない。上記の分析から資本や建造環境という「マクロ・見る者」と，主体の経験という「ミクロ・遊歩者」を媒介する理論構築が都市空間誌を記述するために必要であることが示唆される。

筆者は「マクロ」と「ミクロ」の媒介として「身体」に注目する。「身体」と「空間」が関係する諸理論を分析してみると，ブルデューの理論からは「身体」を社会的世界と行為者とを整合させるハビトゥスを歴史的に物質化した肉であると捉えられ，ギブソンの理論からは，空間を環境・身体間の相互作用のプロセスとして考える視角が開け，ルフェーヴルの理論からは，空間は身体を起点とした広がりであり，身体はリズムの体内化を通じて空間の生産・時間の編成の媒介の役割を果たすということが把握できる。上記の分析から，「身体」と「環境」の相互作用的なプロセスとして「空間」が積み重なっていくという「身体」を媒介とした都市空間誌の理論を展望することができる。

キーワード：都市空間誌，空間，身体，空間の生産，空間論的転回

（2010年9月17日論文受理，2010年11月5日採録決定　『都市文化研究』編集委員会）

1. はじめに―都市をどのように記述すべきか―

1980年代末の「空間論的転回」を契機として種々の新しい空間論が出現し，日本においても1990年代～2000年代にかけて地理学を中心に代表的な論考が紹介された[1)]。これらの新しい空間論はそれまでの空間への視点を問い直す試みであり，必然的に，認識論的な論考が多数生みだされたが[2)]，実証研究へと応用した事例は少なく，ともすれば理論偏重になりがちであった。

ただし，事例は少ないとはいえ，これらの新しい空間論の認識論的理論を適用して近代から現在までの現実の都市空間を記述したモノグラフ・研究も存在している[3)]。これらは，都市の経済的・社会的関係や種々の出来事だけへ関心を寄せるのではなく都市空間への視点が内在することから「都市史」から区別されると同時に，空間をいかに記述するかという方法論的自覚から，いわゆる「地誌」とは区別される。ここでは，これらの諸研究を「新しい都市空間誌」と呼びたい。

しかし，新しい空間論の諸理論の単純な適用によって現実の都市の様相が捉えられるわけではない。地理学に限ってみれば，ある都市に関する数十年スパンの精緻な

モノグラフとして日本に翻訳・紹介されているものはハーヴェイ（2006）のみであり，「新しい都市空間誌」は成功しているとは言い難い現状にある[4]。

なぜ，都市空間誌を書くことが困難なのか。これを問うことが，新しい空間論の再評価と継承につながるのではないかと筆者は考える。この疑問に答えるため，「新しい都市空間誌」を分析することで都市空間を記述することに対する継承すべき点と課題を明らかにし，都市空間誌を記述するための理論構築に向かいたい。分析対象として取り上げる「新しい都市空間誌」はハーヴェイ『パリ―モダニティの首都』とソジャ『第三空間』の第 9 章「ちょっとした戸惑いを刺激として」の 2 点[5]である。

2. ハーヴェイ『パリ―モダニティの都』―メタ理論と出来事の媒介の欠如―

モノグラフの分析に入る前に，まずはハーヴェイの理論を簡単に見ておきたい。マルクス主義的空間分析へ向かったことでしばしば「転向」[6]と表現される『都市と社会的不平等』を経て，ハーヴェイが理論的な精緻化を深めていったのは，『空間編成の経済理論』および『都市の資本論』においてであると考えられる[7]。これらの著作はマルクス『資本論』をベースにして，その理論をより精緻化するため空間の次元を含みこませて表現したものであり，「建造環境」を鍵概念とした都市空間形成の分析に応用可能な資本主義的生産様式の内在的論理に関する理論である。

上記理論の応用ともいうべきモノグラフである『パリ―モダニティの首都』の対象とする期間は 19 世紀（特に 7 月革命からパリ・コミューンまでの 1830～1871 年）であり，資本主義の隆盛や種々の政治過程の変化を主な動因として近世都市パリが近代都市パリへと姿を変えるのを描写している。このモノグラフの原題は *Paris, Capital of Modernity* であり，‘Capital’ という単語は「首都＝資本」という二重の意味を負わされているのではないかと考えられる。資本主義的生産様式に内在する論理が近世の首都パリに浸透していき，金融制度を媒介として高度に資本蓄積し[8]，オスマンのパリ大改造をきっかけとして「創造的破壊」[9]ともいうべき空間編成が引き起こされた。その過程において，職人やその妻子に代表されるプロレタリアート層と銀行家や地主に代表されるブルジョア層が「階級」として空間的に分離してパリ市内に居住し，金融・土地開発といった資本主義のシステムに大きく影響されながら，それぞれに特徴的な建造環境を生み出していくことで定着していった[10]。資本主義的生産様式に内在する論理が上記のように浸透していく結果が「モダニティ」という「何らかの，あるいはすべての先行する歴史的状況との容赦ない断絶を伴うだけでなく，モダニティ自身に内在する断絶と崩壊の終わりのないプロセスによって特徴づけられる」[11]生活全般に対する影響である。端的に言うと，ハーヴェイが都市空間誌として叙述するのは，資本主義的生産様式に内在する論理の 19 世紀パリへの浸透の結果としての空間編成・階級形成・モダニティの様相である[12]。

『空間編成の経済理論』に代表される著者の理論書においては，いわば現実から抽象されたエッセンスとでもいうべき資本主義的生産様式に内在する論理の分析が中心をなすが，対して，都市空間誌は具体的な都市現実の記述である。このモノグラフは，資本主義的生産様式の分析から得られた理論を主軸とするものの，当然ながら，すべての出来事がそのメタ理論によって決定できるわけではない。換言すると，資本主義的生産様式そのものではなく「資本主義的社会構成体」としてのパリの矛盾含みの現実を分析的に記述したものであると考えられる[13]。前提として，メタ理論だけでは説明のつかない事象も扱うことになるため[14]，訳者も指摘する通り表層的な経済決定論であるという評価はあたらないだろう[15]。

ただし，基本的に資本主義的生産様式に内在する論理が大きな動因となり生活全般に対する影響が生じるという基本フレームのもとに記述がなされているため，マルクス主義のマクロなメタ理論ではその動因を間接的にしか説明できない，人々の慣習の形成や政治的抵抗などの生活世界に関わるミクロな出来事については，他の論者が歴史上の有力な出来事と評価している場合であってもほとんど記述されていない[16]。ここでは，人々の生活世界における抵抗が大きな動因となり出来事が現れることを捉えうるベンヤミン的な「遊歩者」[17]の視点は付属的に扱われてしまい，ド・セルトー的な「戦術」[18]が種々の歴史的出来事の決定にかかわるという視点は希薄である[19]。

要約するとハーヴェイの都市空間誌は資本主義的生産様式の分析を現実世界に応用したうえで，その直接の影響を主軸に人々の日常生活としての都市を描くもので，資本主義的生産様式に内在する論理とは必ずしも一体に動かない動因（法・制度や慣習）や人々の抵抗の結果としての種々の出来事や状態を表現しきれていない。その理由は法・制度・慣習・抵抗といったものを扱う都市空間記述のフレームワークが存在していないことに求められる。

3. ソジャ「ちょっとした戸惑いを刺激として」―マクロとミクロの寄せ集め―

ハーヴェイ同様，モノグラフの分析に入る前にソジャ

の理論を簡単に見ておきたい。ソジャは，「空間」を歴史（時間）・社会に比して強く主張されることのなかった存在論の１要素として取り扱い，「歴史性」，「社会性」を強調してきたそれまでの社会理論に対して「空間性」の次元を組み込む必要があることを強調した。また，空間論においては物理的かつ心的な空間（第三空間[20]）の重要性を主張し，物理的空間（第一空間）と心的空間（第二空間）のどちらかのみに依拠した空間論（従来の地理学・建築学など）を退けた。

『第三空間』の第９章である「ちょっとした戸惑いを刺激として　アムステルダムとロサンゼルスの同時代の比較」は上記の存在論・空間論を踏まえ，現実の都市をテクストとして描くモノグラフである。簡単な構成を追っておくと，「スパイストラートにて」，「スパイストラートを離れて」，「後記１」，「後記２」となる。「スパイストラートにて」[21] はアムステルダムのインナーシティの通りの１つであるスパイストラートを中心とした主に著者の経験から導き出される遊歩者の視点でのミクロな都市記述である。「スパイストラートを離れて」[22] はアムステルダムとロサンゼルスの比較である。その前半部は両都市のインナーシティの都市現実が，「正反対であるのに同格でもあるような，対極に位置する都市」[23] として対称的に記述される。例えば，市の中心部に暮らす人口はアムステルダムでは市の全人口の 10％以上であるのに対してロサンゼルスでは１％以下，アムステルダムは都市構造全体がはっきりしており読解が容易なのに対してロサンゼルスは都市の読解可能性の原則をすべて打破しているように見える，といった具合である[24]。後半部は考察対象として両都市の中心地から半径 100 キロメートルのスケールをとり，前半とは逆に，両都市の差異よりも類似性が強調される。両都市とも「ポストフォーディズムの柔軟な蓄積体制」として説明される脱産業化（大量生産工業の斜陽）と再産業化（柔軟に専門化する中小規模の工場の興隆）を特徴とする都市再編が引き起こされたことが示され，それに伴いインナーシティへの金融機関・大学・娯楽産業などの集中やパート・タイム・ジョブの増加といった都市現実が記述される[25]。「後記１」は「上からの眺め，そして下からの眺めについて」と題され，「見る者」の視点（マクロ）と「遊歩者」の視点（ミクロ）のどちらからも捉えられる都市をどのように記述すればよいかという点についての著者の見解であり[26]，「後記２」は「ポストメトロポリスへの予感」と題され，この書の結論であると同時に姉妹書でもある *Postmetropolis*[27] への開口部を成すホミ・バーバと著者の詩で締めくくられている。

「後記１」において著者は以下のように設問を立てる。「わたしたちは，アムステルダムやロサンゼルス，もしくは現実かつ想像上の都市空間についてどのようにしてより多くのことを学んだらよいのか。日常生活のミクロ地理に没入し，都市の街路からの局所的な眺めに従うことによってなのか，それとも，都市を全体として観察し，より包括的に地域的スケールないしはマクロ空間スケールで都市の状況を概念化することによってなのか。」[28] 要するに都市空間をどのような視点からどのように理解したらよいのかということでる。当然，アムステルダムとロサンゼルスを分析するこの章自体が設問に対する解答になっていなければならない。設問の直後になされる著者の答えは以下のようなものである。「都市を理解するにはミクロな見方とマクロな見方の両方がともなわれねばならず，どちらかが本質的に優先されることがあってはならない。そして，どれだけ巧みで精緻な伝記作家でも，ある人の生涯を完璧に知ることは不可能であるように，わたしたちがどのような視角をとろうとも，完璧に知ることのできる都市―さらに，生きられる空間―などない，という認識も必要である。したがって，ミクロ対マクロの選択に対する適切な答えは，どちらかという二者択一を断定的・創造的に棄却し，全面的にどちらも二者対等に採用することである。」[29] 結局は他の視点の可能性を留保しながらも，主に動因としての資本と結果としての建造環境を記述するマクロな視点と主体の経験を記述するミクロな視点のどちらか一方を優先させずに，両視点からの都市の様相を並列に扱い記述するということになる。まるで，都市空間に関する決して閉じることのないテクストを前提とした「見る者」と「遊歩者」のフーガのようなものである。

ただし，その記述法が都市空間誌として成功しているかというと疑問である。マクロな都市の全体像に対して，ミクロな主体の経験がどのように関係しているのかが不明瞭であり，著者の選択次第でスケールにかかわらずにどんなものでも寄せ集め陳列してしまい，さながら都市を舞台にしたテーマのない展覧会のようである。どのようなテクストであれ恣意性を完全に奪うことは不可能であるとしても，著者の選択が唯一の基準であるその記述からは論理的な整合性を感じられず，読者の納得を得ることはできていないのではないか。このように都市空間誌として成功しているとは感じられない理由は，都市の全体像と主体の経験を両方とも同じテクストの中で相互に関係付けながら扱いうるフレームワーク（マクロとミクロを媒介する理論）の欠如に求められると考えられる。

4. マクロ・ミクロの媒介の必要性―新しい都市空間誌の成果と課題―

上記の分析から明らかなように，ハーヴェイやソジャ

に代表される「新しい都市空間誌」はマクロ（見る者）・ミクロ（遊歩者）という 2 つの視点をはっきりと意識して叙述されており，その 2 つの視点が都市空間誌を記述するにあたって避けては通れないものであるということを読者に印象付けた点が成果のひとつであろう。

しかし，マクロとミクロの扱い方に関しては一方に優位を置く（ハーヴェイ）か，両者の単純な並列（ソジャ）にとどまり，2 つの視点を利用してどのように都市空間を記述するかということについては解決していない。その理由は，資本主義的生産様式に内在する論理とは必ずしも一体に動かない動因（法・制度や慣習）や人々の抵抗の結果としての種々のミクロな出来事を記述に含ませつつマクロとミクロを媒介可能な理論・フレームワークの欠如であると考えられる。

上記を克服し「新しい都市空間誌」の上にさらなる空間論・都市空間誌を蓄積することこそ，現在，解決を目指さなければならない課題であると考えられる。以下ではマクロとミクロを媒介する理論・フレームワークの構築を展望したい。

5. マクロ・ミクロの媒介としての「身体」の可能性

上記でみたように，ハーヴェイの都市空間誌は資本主義的社会構成体としてのパリを分析し，近代の資本蓄積の過程としての産業構造の変化・階級の分化・建造環境の編成とその社会状況での生活スタイルを描いている。また，ソジャの都市空間誌はポストフォーディズム下の都市環境と主体の経験を並行に記述している。これらの都市空間誌には，その社会状況から影響を受けながら様々に行動・活動し種々の出来事を現象させる「身体」の記述が抜けているのではないか。筆者はこの抜け落ちた「身体」が「見る者」と「遊歩者」，マクロとミクロを媒介し，都市空間誌に新たな局面を持ちこみうる概念であると考えている。

以下では「身体」がマクロとミクロの媒介となる可能性を追及するため，種々の論者の「身体」概念を検討する。検討対象とする論者はブルデュー，ギブソン，ルフェーヴルである。いずれの論者もその空間的な思索において「身体」に特別の位置を与えている。

6. ブルデューの「身体」―ハビトゥスが歴史的に物質化した肉―

ブルデューの社会理論の貢献のひとつは，社会の中の客観的な構造と主観的な行為者の間の二項対立を媒介する理論を作り，従来は客観か主観のどちらかからしか説明されなかった事象をうまく説明したことであると考える。一種の経済学的な闘争のアリーナをハビトゥス・プラチック・ディスポジシオン・場（champ）・社会的世界などの概念群（**表 1** 参照）を用いながら現実の世界に見出し，客観と主観のどちらかに寄らず，両者を媒介させることに成功した[30]。

このブルデューの社会理論において，身体化されたプラチックの産出・組織原理である「ハビトゥス」，「ハビトゥス」により産出される意識的または無意識的な戦略的行為である「プラチック」などの主要疑念を考察すると「身体」がひとつの起点として大きな役割を果たし

表 1　ブルデュー社会理論の主要概念

概念	説明
プラチック（pratique）	人々が行う意識的または無意識的な戦略的行為。日常語であり、しばしば「実践」と訳されるが、行為に対する明確な意図はなく「実際・実用」という語に近い。
社会的世界	いわゆる自然界の対概念で社会的観点から捉えられた世界。
社会空間	プラチックによって構造化された界の集積。社会的位置の集合で物理的位置ではない。
界（champ）	行為者がプラチックを産出する場。行為者の主観により捉えられた社会的な諸条件に束縛された場。
ハビトゥス	持続性を持ち移調可能なディスポジシオンの体系。プラチックの産出・組織原理として機能する。
ディスポジシオン	身体に構造化されたある程度の自由を含むゆるやかな規則性。プラチックが構造化されている原因。

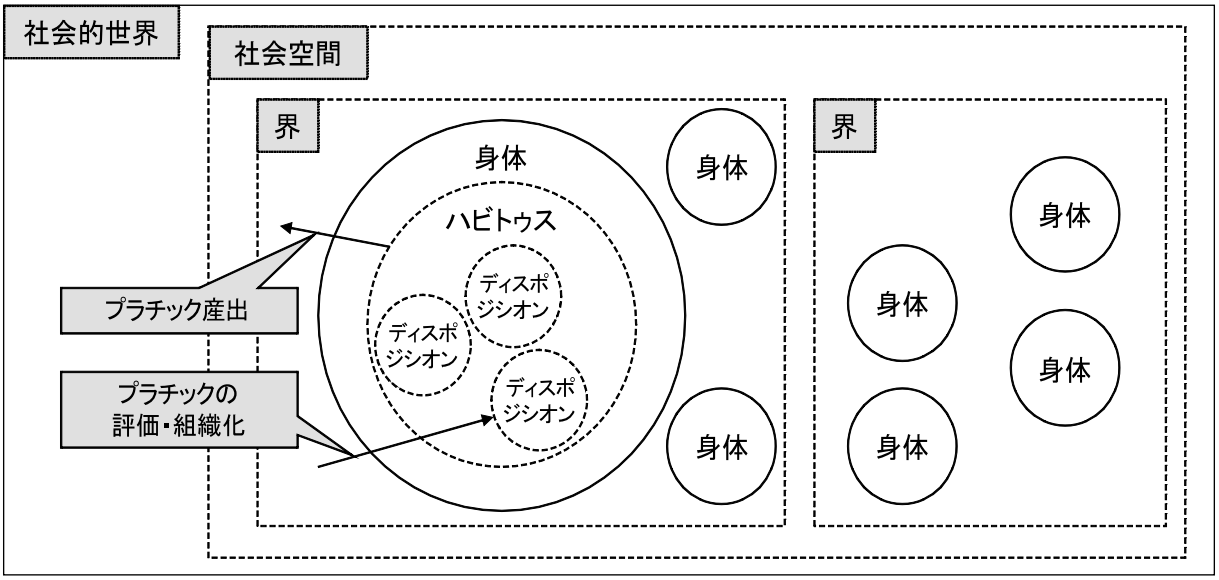

図1　ブルデューの諸概念と身体との関係

ていることが分かる。例えば，「ハビトゥス」を「身体化された生産物」[31]，「歴史の体内化」[32]，「規範の肉体化」[33]，「身体に持続可能なかたちで受肉化」[34] のように，個人の「身体」に構造化されるものとして表現することに端的に表れている。

ブルデューにとって「身体」はハビトゥスが歴史的に体内化された物質的なものであるようだ[35]。端的に言うと「身体」はプラチックの産出原理を持つ歴史的に作られた物だということである。

では，プラチックの産出原理を持つ歴史的に作られた物としての「身体」は他の概念群とどのような関係にあるのだろうか。ブルデュー社会理論の主要概念と「身体」との関係を整理すると以下のようになる（**図1**参照）。「身体」は諸ディスポジシオンの総体としてのハビトゥスを体内化することで，社会的世界のうちのある界（champ）・社会空間のプラチックを評価し組織立てる行為・行動を為す。また，新たなプラチックを産出し，その結果として新たな界・社会空間を設定する行為・行動を為す。つまり「身体」はマクロな社会的世界，および，それとミクロな行為者とを整合させるシステム（＝ハビトゥス）を内蔵した社会的世界の中で歴史的・時間的に作り出され現実に行動する物質の役割を与えられている。誤解を恐れず要約すれば，「身体」はハビトゥスが歴史的に物質化した肉である。

7. ギブソンの「身体」―環境・身体間の絶え間ないプロセス―

ギブソン[36] は人間だけではなく動物全般に一般化できる知覚の理論を追及した。主著である『生態学的視覚論』を中心として，「アフォーダンス」[37] という独自の概念を用いて環境と動物の相補的な関係を捉えることで意識による概念創作以前の空間の性質を記述している。

まず，ある動物個体の身体の周りの空間すべてを「環境」と定義している[38]。環境は自然－人工の区別はなく，人間であろうが動物であろうが，それらによる環境の改変の積み重ねとして存在する[39]。また，木，道，空間といった何らかの概念で種々の環境を分けるのではなく，動物の知覚や行動を制限するかどうかを判断基準とし，環境を媒質（medium）[40] と物質（substances）[41] およびそれらを分かつ面（surfaces）[42] によって記述する。また，知覚する個体以外の動物を複雑な意味を与える環境の一部と考える[43]。

では，動物についてはどのように考えているのであろうか。ギブソンによれば，動物は環境の知覚者であり環境内の行動者であるが，物理学的な空間・時間を知覚しているのではなく[44]，あくまでも，媒質・物質・面などからもたらされる情報（アフォーダンス）を知覚している（**図2**参照）。佐々木の言葉を借りると「環境は潜在的な可能性の海であり，私たちはそこに価値を発見し続けている」[45] ということになる。

ギブソンが提唱した生態学的心理学から見えることは環境と身体は相補的であり，どちらが欠けても空間は成立しないということである。空間と身体を切り分けて考えることが数学や物理学を中心とした近代科学の影響にすぎず，その影響から一歩身を引くことで，動物の身体が環境を改変した結果，動物の身体が受け取る情報が変化し，動物の身体が新たな行動を為し…，という空間を環境・身体間の絶え間ないプロセスとして考える視角が開ける。

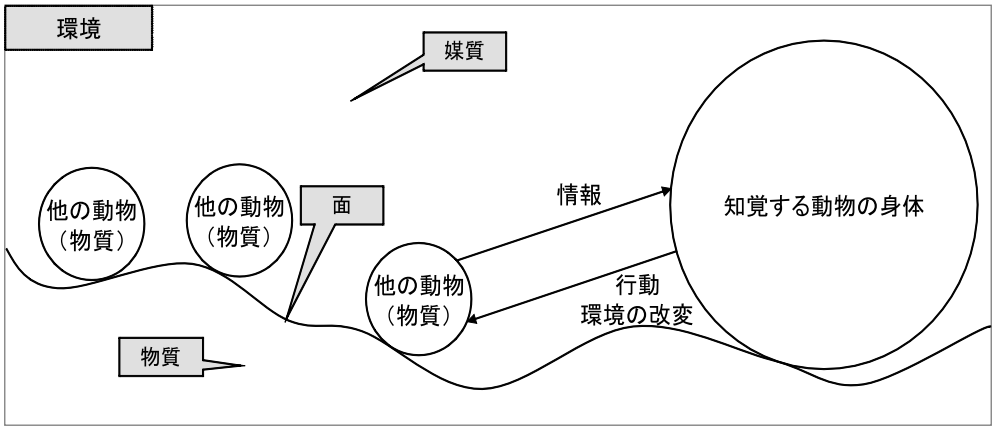

図 2　ギブソンの環境と知覚する動物の身体との関係

8. ルフェーヴルの「身体」―空間の生産・時間の編成の媒介―

ハーヴェイ，ソジャ，マッシー，グレゴリーなど「空間論的転回」を先導した論者は多かれ少なかれアンリ・ルフェーヴル（特にその著作の『空間の生産』[46] に影響を受けている[47]。ただしその影響はもっぱら「空間」というタームに関してのみといっても過言ではないのではなかろうか[48]。ルフェーヴルは『空間の生産』を補完する形で「時間・歴史」に関しても思索を深めており，「空間」と「時間」の関係の結節点として「身体」に特別な位置を与えたうえで[49]，現代社会を分析している。ここでは空間論的転回に対して大きな影響を与えた空間論『空間の生産』と遺作である時間論 *Rhythmanalysis* を中心にルフェーヴルの「身体」の位置を論じる。

まずは『空間の生産』を見ることで，ルフェーヴルの「身体」と「空間」の主要概念を抽出してみたい。ルフェーヴルは史的唯物論の影響で過度に歴史主義的であり，かつ，空間に関しては単純な枠組みでしか語りえていない学問・思想状況において，この著書の中で世界（社会構成体と言い換えてもよいかもしれない）に「社会空間」という分析概念を当てはめ，「（社会）空間とは（社会的）生産物である。」[50] というテーゼを記した。そして「社会空間」を分析するために 3 つの「社会空間の契機」を概念構築した。それが有名な「空間的実践（プラスチック）」，「空間の表象」，「表象の空間」という空間の三重性である。同時に，空間の三重性と対になる形で「知覚されるもの」，「思考されるもの」，「生きられる経験」という身体の三重性を概念構築している[51]。

空間論的転回以後，「空間的実践（プラスチック）」，「空間の表象」，「表象の空間」という空間の三重性は，広く人文諸科学に受容されてきたのであるが，対になるべき「知覚されるもの」，「思考されるもの」，「生きられる経験」という身体の三重性はそれ独自の概念として受容されず，もっぱら空間の三重性と同一視する形で受けとめられてきたのではないか[52]。この空間の三重性と身体の三重性の同一視が以後の新しい空間論からミクロとマクロを媒介させる可能性を持つであろう「身体」の契機を奪ってきたのではないか[53]。ルフェーヴルの言葉を借りると「空間が感じとられ，生きられ，生産されるのは，身体にもとづいている」[54] のであり，「空間」の分析の際，「身体」は「空間」とは慎重に分離すべき概念なのである。

では「身体」と「空間」はどのように関係づけられているのであろうか。ルフェーヴルは「社会空間」を「身体」から生じてくるものであると捉え，また「社会空間」の秩序の生成の説明にも「身体」の秩序を活用しなければならないと説く[55]。つまり，ルフェーヴルにとって「身体」とは「社会空間」を分析するスタート地点となる最初の「空間」なのである[56]。分析のスタート地点となる最初の「空間」である「身体」の周りには，「身体」との対応関係の中で把握される「空間」が広がり，そこには「他者の身体」も存在する[57]。「他者の身体」までも含めたすべての「空間」が「身体」と関係をもつことによって初めて把握可能となるわけである。上記の検討から見えてくるルフェーヴルの「身体」と「空間」の関係は，「空間」を「身体」が起点となる広がりと捉え，「身体」以外の「空間」は「身体」との関係のもとでこそ把握可能であるということに要約できるであろう。

では，「身体」と「空間」の関係はある社会状況の中，どのように構築されていくと考えているのであろうか。ここでは『空間の生産』に加えて，ルフェーヴルの時間論である *Rhythmanalysis* も見ていきたい。「身体」がある特定の社会状況の中にあるということは，既存の社会に入り，そこに慣れるということではなく，「身体」自らが「空間」を生産・再生産しながら，その「身体」が「空間」的属性を自身のうちで規定していくことである[58]。そのため，ある社会状況における「身体」と「空間」の関係を記述するためには，「身体」に対する「空間」の影響（あらゆる権力の作動）および，「空間」へ

の「身体」の影響の双方を把握しなければならない。例えば，現代において「身体」は資本主義的生産様式の分業の要請（空間の生産・時間の編成として表れる）を受け社会的に構築され，日々特定の「空間」を再生産していると考えられる[59]。

「空間」の「身体」への影響・「身体」の「空間」への影響の双方を把握するためには，「空間の生産」の様態を把握することに加えて，「時間の編成」の分析が重要となる。ルフェーヴルは「空間の生産」と「時間の編成」が合わさった「身体」への影響と，「身体」からの「空間」への影響を分析するため「リズム」という概念を用いる[60]。「リズム」は「空間の生産」と「時間の編成」を通して作り出され，「身体」のうちに複数の「リズム」が調和した束として構成される[61]。そのため，「リズム」を介して「身体」と社会状況が関係づけられることになる[62]。新たな「空間の生産」と「時間の編成」によって「身体」を構成する調和した「リズム」に変化が生じる[63]。「リズム」は変調・不調をきたすのであるが，「空間の生産」・「時間の編成」を通じてあるリズムが反復的に繰り返される「調教」[64] により再び周期的な「リズム」を「身体」が獲得するにいたる。「空間」を分析する道具として「身体」を用いることとは，「空間の生産」・「時間の編成」により「身体」が日常的に反復する「リズム」を獲得することで，「身体」が新たな「空間」を生産するという媒介の役割を「身体」に与えることなのである。

ここまでの議論では，規律＝訓練型の権力や生－権力（フーコー）によって「身体」が徹底的に飼いならされてしまう事態と同様に見えるが，ルフェーヴルは「身体」を抵抗の拠点としても構想している[65]。確かに「空間の生産」と「時間の編成」によって「リズム」が作り出される際，「法，計算され予測された義務，ある事業といった計測＝尺度（measure）」[66] に特徴的な統治の戦略に裏打ちされ反復を促されるわけであるが，その反復は完璧に同じものとしていつまでも成し遂げられるわけではなく，差異が持ち込まれる[67]。その差異を生み出す能力こそ「身体」の持つ秘密であると考えられている[68]。結果，「身体」を再領有することを通して，「空間」を再領有することこそ，現状を睨んだ革命的プログラムの条件となるという展望にいたる[69]。

最後にルフェーヴルの「身体」についてまとめると以下のようになる。①「空間」を「身体」を起点とした広がりと捉える。②「身体」以外の空間は「身体」との関係のもとでこそ把握可能である。③「身体」は「リズム」の体内化を通じて「空間の生産」・「時間の編成」の媒介の役割を果たす。④「身体」はリズムの反復を乱し，統治を可能とする権力の働きとは一致しない「空間の生産」・「時間の編成」をもたらす場合がある。

9.「身体」を媒介とした都市空間誌の理論へ向かって

都市空間を記述するためのマクロとミクロの媒介としての「身体」をブルデュー，ギブソン，ルフェーヴルの諸理論を通じて検討してきた。3 者の議論を関連させて「空間」「時間」「身体」について簡単に整理するならば以下のようになる。「身体」は「ハビトゥス」や「リズム」が「時間」を経て物質化した最初の起点となる「空間」であり（ブルデュー，ルフェーヴル），その「身体」以外の「空間」は「環境」として「身体」と相互作用している（ギブソン）。この相互作用を一定の状態に保つのも，そこに差異を持ち込むのも「身体」であり，「身体」が「空間の生産」・「時間の編成」の媒介としての役割を果たす（ルフェーヴル）。

以下では，上記のように互いに関連付けて要約可能な洞察をもとに，「身体」を媒介とした都市空間誌の理論を本論の結論として展望してみたい（**図 3** 参照）。

まずは，「空間」を，独自の物質的な形を持つ自己の「身体」と自己の「身体」以外の世界で知覚可能な物質の総体である「環境」との絶え間ない相互作用のプロセス[70] として定義する。ここで，「環境」という概念を導入する理由は 2 点ある。1 点目はギブソンに顕著な「身体」と「環境」が対立したものであり，かつ，相互作用するものであると捉える視点を重視するためである。2 点目はルフェーヴルの「身体」を検討した際にも記述した通り，「身体」は「空間」と対立する概念として捉えるべきではなく，「身体」は「空間」に包含される概念と捉えるべきと考えるからである。結果として，自己の「身体」を除いた「空間」が「環境」として定義される。また，ルフェーヴルやブルデューの検討からわかるとおり，どの「身体」も「環境」の周期的な改変・領有様式である「リズム」，および，知覚・解釈・行動の規則としての「ハビトゥス」を体内化している。

いずれの地理的位置・時代においても，独自の「空間」が生産されると同時に，「時間」が編成される。ここで，ある「生産された空間」・「編成された時間」において「身体」を束縛する地理的・歴史的（結果としての社会的）要請を「周期」と定義する。ある「周期」のもとで「身体」が「環境」を改変・領有する際に「環境」を知覚することで「環境」中からさまざまな「情報」を取得する。この「情報」はテクストや記号にとどまらず，物質全般を知覚することで取得されるものである（例えば，相手先を訪問すると駐車場が無かった，周りの人が走り去っていく，先生が怒鳴っている，といったことも全て「情報」となる）。その「情報」を解釈することでその「身体」独自の「リズム」と「ハビトゥス」に絶え間ない規制をかける。その結果，「リズム」と「ハビトゥス」

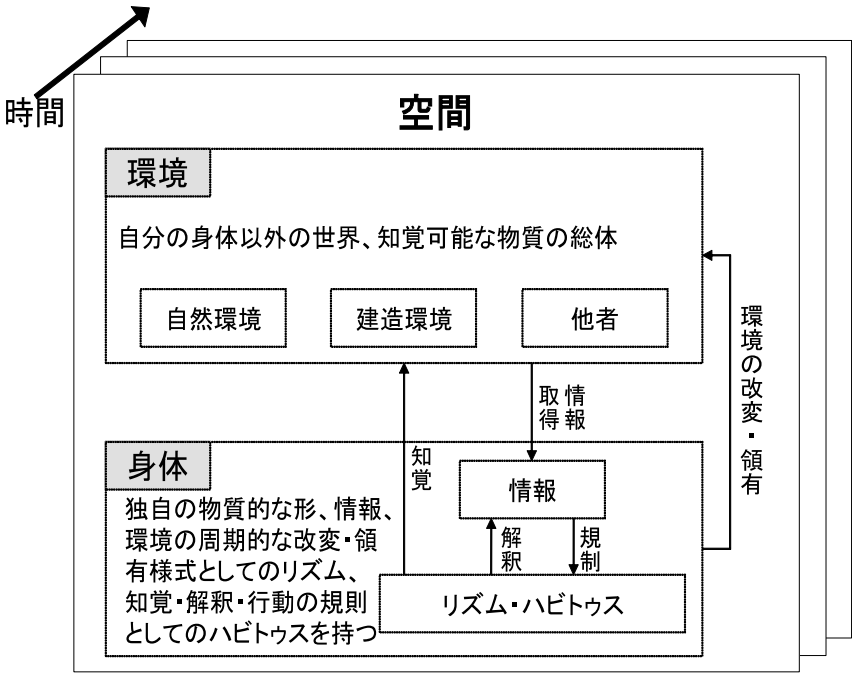

図 3 「身体」を媒介とした都市空間誌の理論の素描

が更新され，「身体」は新しいやりかたで「環境」を改変・領有する（例えば，相手先訪問時は自家用車ではなく公共交通機関で行く，危なそうなのでなんとなく同じ方向に走り去ったものの実際には何もなかったので今度から確認する，この先生の宿題を忘れた際は言い訳をしないようにするなど，「環境」を改変・領有するやりかたが変化していく）。

地理的・歴史的要請としての特定の「周期」のもとで，個々人の「身体」はある程度共通した「環境」から「情報」を取得することになるため，個々人の「リズム」・「ハビトゥス」も地理的・歴史的に一定の共通性を持つ。結果として，「環境」を改変・領有するやりかたにも一定の地理的・歴史的共通性が生まれる。この地理的・歴史的にある程度共通した「環境」の改変・領有様式を「ライフスタイル」と呼ぶ。個々人の「ライフスタイル」は地域・時代・階層・性別・年齢などによってある程度の共通性を帯びる。ある「ライフスタイル」のもと新たな「周期」が地理的・歴史的な共通性を帯びて成立する。成立した新しい「周期」に従って，個々人の「身体」が「環境」を改変・領有する過程で様々な「情報」を取得し，個々人の「リズム」・「ハビトゥス」に規制をかけ，新しいやりかたで「環境」を改変・領有し，その集積として新しい「ライフスタイル」が生み出される。このように，地理的・歴史的な一定の共通性を帯びた「周期」・「ライフスタイル」が成立するような，ある空間的・時間的スパンを持った「身体」と「環境」の相互作用のプロセスとして「空間」が生産され，「空間」の生産の蓄積により「時間」が編成されていくと筆者は考える。例示として現代に即して考えるならば，法・制度，その維持を可能ならしめる政治機構や警察機構などの統治機構，それにもとづいた環境の改変を可能ならしめる資本などのマクロな要請としての「周期」にもとづいた「ライフスタイル」を可能とする現代都市の「空間」が生産・再生産されるわけである（都市に居住するいわゆるサラリーマン世帯の「ライフスタイル」を思い描いてほしい）。

ここで，地理的・歴史的な共通性が成立することにかかわる議論から，そこに差異が持ち込まれ，共通性が変化していく議論へと視点を変えてみたい。ある特定の「身体」が一定のミクロなやりかたのもとで「環境」を改変・領有することにより，地理的・歴史的な共通性を帯びた「周期」・「ライフスタイル」に差異が持ち込まれることがあるからである。

ふつう，社会構成体には一定の状態を維持し統治を可能ならしめるよう権力が働いており，その影響のもとで通常状態としての「周期」が成立している。その「周期」のもとで，通常状態の「環境」から通常状態の「リズム」・「ハビトゥス」に従って個々の「身体」が「情報」を取得することで，通常状態としての「環境」の改変・領有の様式＝「ライフスタイル」が成立している。通常状態でこのプロセスの動因となるのが法・制度，統治機構，資本といったシステムであり，個々人の「身体」はそのシステムが主な動因となり成立した「空間」・「時間」のうちにある。ただし，ある特定の「身体」が「環境」から「情報」を取得するうちに，その「身体」の「リズム」・「ハビトゥス」が通常状態の「環境」と不適合を生み出す場合がある[71]。時にはある特定の「身体」が，その不適合を是正しようと努め，通常常態を乱し，通常状態とは異なる動因で生み出される社会構成体を成立させる場

合がある[72]。このような「周期」・「ライフスタイル」へのミクロな「差異」の持ち込みの捉え方こそ，経済決定論・環境決定論的な都市空間記述を超え，種々の運動まで含めたパースペクティブにもとづく都市空間誌を成立させうる可能性があるように考えられる。

上記のような「空間（環境・身体）」・「時間」の認識枠組みが都市空間誌記述のための理論として有効ではないだろうか。以上，素描のレベルであるが「身体」を媒介とした都市空間誌の理論構築を試みた。今後は実際の都市空間誌の記述へと向かうと同時に，この素描の一層の精緻化を図ることになる。

謝辞

都市空間誌研究会において水内俊雄教授（大阪市立大学），大城直樹准教授（神戸大学），加藤政洋准教授（立命館大学）から，また，批判地理学の若手有志の研究会において泉谷洋平氏，北川眞也氏（関西学院大学），熊谷美香氏，原口剛氏（神戸大学），福本拓氏（三重大学），本岡拓哉氏（立命館大学）などからいただいたご指摘に多くを依っています。ここに記して感謝致します。

注

1．ハーヴェイ，デヴィッド（1999）『ポストモダニティの条件』青木書店，ソジャ，エドワード・W（2003）『ポストモダン地理学』青土社，同（2005）『第三空間』青土社，マッシー，ドリーン（2002）「権力の幾何学と進歩的な場所感覚」『思想』933，p. 32-44 など。その他，カステルに代表される新しい都市社会学の論者やトムソン，ウィリアムズといったイギリスのマルクス主義の伝統に属する論者も紹介された。

2．日本においての代表例は大城直樹（1994）「墓地と場所感覚」『地理学評論』67A(3)，p. 169-182，加藤政洋（1999）「ポストモダン人文地理学とモダニズム的「都市のまなざし」」『人文地理』51-2，p. 48-65 など。

3．ハーヴェイ，デヴィッド（2006）『パリ―モダニティの首都』青土社，ソジャ，エドワード・W（2003）p. 286-321，同（2005）p. 355-407

4．ただし，地理学者の手によるものではないが，マイク・デイヴィス（2008）『要塞都市 LA 増補新版』（青土社）はポストモダン的視点から描いたロサンゼルスの都市空間に関する分厚いモノグラフとして読める。また，日本においては 1980 年代に隆盛した「都市論」の系譜を引く研究としていくつかのモノグラフ・研究が書かれている。代表的な著作として吉見俊哉（1987）『都市のドラマトゥルギー―東京・盛り場の社会史―』弘文堂，加藤政洋（2005）『花街―異空間の都市史―』朝日新聞社，原武史（2007）『増補 皇居前広場』筑摩書房，ちくま学芸文庫版などがある。本論では，主に，ハーヴェイとソジャを対象として議論をすすめる。

5．ハーヴェイ（2006）およびソジャ（2005）p. 355-407

6．竹内啓一（1984）「デヴィド・ハーヴェイの地理学」『一橋論叢』92 (2)，p. 162-179

7．ハーヴェイ，デヴィッド（1980）『都市と社会的不平等』日本ブリタニカ，ハーヴェイ，デヴィッド（1989，1990）『空間編成の経済理論　上下』大明堂，ハーヴェイ，デヴィッド（1991）『都市の資本論』青木書店

8．ハーヴェイはこの時期のパリを「架空の資本―勘定操作によって増加した証券信用の紙片によって支配される―が幅を利かせる世界」と表現している。ハーヴェイ（2006）p. 49。

9．ハーヴェイ（2006）p. 17 および p. 327

10. ハーヴェイ（2006）p. 250-256

11. ハーヴェイ（1999）p. 26

12.「空間関係からはじまり，つぎに（信用貸し・地代・税の）分配，生産と労働市場，（労働力，階級関係・コミュニティ関係の）再生産を通り，最後に，生きた都市の現実の歴史地理として空間を突き動かす意識形成へといたる諸テーマのスパイラルを，私は心に描いているのである。」ハーヴェイ（2006）p. 137。

13. ハーヴェイは，マルクスの『資本論』と『ルイボナパルトのブリュメール 18 日』とを対比しながら，両概念の関係を以下のように述べている。「マルクス主義の伝統を受け継ぐ現代の論者は，このんで資本主義的生産様式に関連するものとしての階級の概念と資本主義的社会構成体に関連する階級の諸概念とを区別する。この区別は有益である。資本主義的生産様式の形態的な分析は，すべての複雑な諸特徴をはぎとったあとにのこる資本主義の完全な論理の解明を追及するものである。ここで使われる諸概念は，その課題に取って必要なものさえ前提すればよい。しかし一つの社会的構成体―特殊な歴史的時代に構成されるひとつの特殊な社会―は，これよりずっと複雑である。」ハーヴェイ（1989）p. 66

14.「たいていの都市の諸理論は，あまりに一方的で融通の利かない代物のように見えるため都市経験の複雑性と豊饒さを掴むことができず骨抜きにしてしまう。それゆえに，都市と都市経験にひとつの方向で接近することはできない」という著者の都市空間誌に対する考えにもこの前提は表れている。ハーヴェイ（2006）p. 27。

15. ハーヴェイ（2006）p. 433

16. この点はマルクスやルフェーヴルが評価するパリ・コミューンについての記述の少なさに端的に表れている。労働者階級の自治という社会主義に大きく関わる一般的評価がある出来事であろうとも，「1848 年以降，喪失感と剥奪感をもった大衆を置き去りにして，パリを所有し自分たちの個別利害と目的のために作り変えたのは，オスマンと開発業者，投機家と金融家，そして市場の諸勢力であった」という経済的なものがこの時代の歴史を形成する主な動因だというハーヴェイの認識（ハーヴェイ（2006）p. 118）が優越し，「パリ・コミューンで実際に何がおこったかはわれわれの知識の及ぶところではない」（同 p. 387）とあっさりと片付けてしまっている。

17. ベンヤミン，ヴァルター（2003）『パサージュ論　第 3 巻』岩波書店，岩波現代文庫版

18. ド・セルトー，ミシェル（1987）『日常的実践のポイエティーク』国文社

19. この点は加藤（1999）の理論に対する指摘と同様の事態が空間の具体的記述においても表れていると考えられる。

20. ソジャ（2005）は第三空間をルフェーヴルにインスパイアされつつ，「中心と周縁，抽象と具体，概念的な情熱空間と生きられる情熱空間の間の生成的かつ問題構制的な相互作用によって実存的に形成され，空間的実践 *spatial praxis*―不均等に発展した（空間的）権力の領野における（空間的）知の（空間的）行動への変換―のなかに物質的かつ隠喩的に区画づけられて」いる「経験・感情・出来事・政治的選択の可知的かつ不可知的な，現実かつ想像上の生活世界」と捉えている。(p. 42-43)

21. ソジャ（2005）p. 356-373

22. ソジャ（2005）p. 373-388

23. ソジャ（2005）p. 373

24. ソジャ（2005）p. 373-377

25. ソジャ（2005）p. 377-388

26. ソジャ（2005）p. 388-394

27. Soja, Edward W *Postmetropolis* Blackwell, 2005.

28. ソジャ（2005）p. 388

29. ソジャ（2005）p. 389
30. ブルデューの社会理論を最も包括的に説明している邦訳文献は〈ブルデュー，ピエール（1990）『ディスタンクシオンⅠⅡ』藤原書店〉である。その他，諸概念を著者自身が比較的わかりやすく説明した著書として，〈同（1991a）『社会学の社会学』藤原書店〉，および，〈同（1991b）『構造と実践』藤原書店〉を挙げておく。
31. ブルデュー，ピエール（1988）『実践感覚 1』みすず書房，p. 83
32. 同（1988）p. 92
33. 同（1988）p. 265
34. 同（1991a）p. 170
35.「規則に適った即興によって持続的に組み立てられる算出原理であるハビトゥスは，プラチック感覚として，制度の中に客観化されている意味の再活性化を行う。ハビトゥスは客観的な諸構造がそうである集合的歴史の所産が，その機能の条件たる持続的で調整されたディスポジシオンという形での自己再生産に達するために必要な領有および強化の労働の産物であるが，それは体内化に対して自らの特殊な論理を課す特殊な歴史の流れの中で自己構成する。（中略）ハビトゥスが同じひとつの歴史の―より正確には，ハビトゥスと構造とに客観化された同じひとつの歴史の―体内化である限りにおいて，またその限りでのみ，ハビトゥスの生み出すプラチックは相互に理解可能で，諸構造に直接整合し，相互に調和したものなのであって，主観的意図と，個人的，集合的を問わず意識的な投企とを超越した客観的意味，統一的でも体系的でもある意味を備えることになる。プラチック感覚と客観的意味との合致がもたらす根本的な効果は常識の世界の生産にある。」ブルデュー（1988）p. 91-92
36. James Jerome Gibson（1904-1979）。アメリカ合衆国の心理学者。知覚研究を専門とし，認知心理学とは一線を画した直接知覚説を展開し，生態学的心理学の領域を切り拓いた。
37.「与える／もたらす」という意味の動詞 afford を名詞化したギブソンの造語で，ギブソン本人によって「環境が動物に提供する（offers）もの，良いものであれ悪いものであれ，用意したり備えたりする（provide or furnish）ものである。」と定義されている（ギブソン，ジェームス，J（1986）『生態学的視覚論―ヒトの知覚世界を探る』サイエンス社，p. 137）。日本におけるアフォーダンス研究の第一人者である佐々木は「動物に環境が提供する「価値」。・・・環境の中に実在する，知覚者にとっての価値のある情報。」として説明している（佐々木正人（1994）『アフォーダンス―新しい認知の理論―』岩波書店 p. 60～61）。
38.「知覚し，行動する生活体，すなわち動物の周囲の世界」ギブソン（1986）p. 7
39.「人類はなぜその環境の形や物質を変えてきたのだろうか。それは，環境が人間にアフォードするものを変えるためにである。人類は，人類に資するものをいっそう有効にし，人類に害となるものをより抑えてきた。・・・これは新しい（new）環境―自然環境とは区別される人工的環境―ではなく，同じ古い環境が人類により改変されてきたのである。あたかも 2 つの環境があるかのように，自然環境と人工的環境とを分離するのは，間違っている。人工物は自然の物質から作られねばならない。またあたかも物質的産物の世界とは別個に精神的産物の世界が存在するように，自然環境と文化的環境を区別することも同じく間違いである。多様ではあるが 1 つの世界しか存在せず，我々人類は自分たちに都合の良いように世界を変えてきたが，その世界にすべての動物が生きているのである。」ギブソン（1986）p. 140
40.「呼吸を可能にし，運動することができ，見ることができるように照明で満たすことができ，また振動や拡散する発散物を検知することを可能にする。さらにそれは均質であり，上－下という関係軸を有す。」ギブソン（1986）p. 19
41.「物質はそれぞれ化学的ならびに物理的構成がともに異なる～。物質は化合され，また非常に複雑な仕方で合体したものである。したがって媒質とは異なり，均質化の傾向がない。そして，相互に重なり合った構成単位が階層をなして構造化されている。これらの異なる構成要素は動物の行動，たとえば食べること，移動を妨げること，操作したり，物を作ったりすることなどに対し全く異なった可能性をもっている。」ギブソン（1986）p. 23
42.「媒質は面（surface）によって環境物質から分離されている。物質が持続する限り，その面も持続する。すべての面は私が意味するところのある一定の配置（layout）を有し，その配置もまた持続する傾向がある。配置の持続面は面の変化に対する抵抗力に依存する。もし物質が気体変化すると，その物質はもはや存在しなくなり，面もその配置とともになくなってしまう。」ギブソン（1986）p. 23
43.「どの動物の周囲の世界も植物や無生物はもちろん，自分以外の他の動物をも含んでいる」ギブソン（1986）p. 7
44.「動物はすべて多少とも知覚者であり，行動者である。～そして環境の知覚者であり，環境内での行動者である。物理学の世界を知覚するわけでもないし，物理学の時間と空間の中で行動するのではない。」ギブソン（1986）p. 8
45. 佐々木（1994）p. 63
46. ルフェーヴル，アンリ（2000）『空間の生産』青木書店
47. 南後由和（2006）「アンリ・ルフェーヴル―空間論とその前後―」p. 190（加藤政洋，大城直樹編著（2006）『都市空間の地理学』ミネルヴァ書房）
48. とりわけ「空間の生産」以後に書かれた *Rhythmanalysis* が時間論として重要である。（Lefebvre, Henri *Rhythmanalysis: Space, Time and Everyday Life.* Continuum, 2004.）この著作（英語版）の解説者であるエルデンによると「現在，ルフェーヴルの仕事を領有する際に歴史的な次元はしばしば無視されてきた。これは彼の重大な読み違えである。そして，彼はこの著作の最後の部分に『リズムの分析・リズムアナリシスは空間の生産についての説明を補完することになるであろう』と書き記している」と書き，ルフェーヴルの時間論を無視しがちな現在の潮流を批判している。Elden, Stuart “Rhythmanalysis: An Introduction” p. ix（In Lefebvre, Henri（2004））.
49.「リズムの分析やリズムアナリシス的なプロジェクトにおいて身体への視点を一瞬たりとも失ってはならない。」Lefebvre（2004）p. 67
50. ルフェーヴル（2000）p. 67
51.「知覚され，思考され，生きられる身体の三重性（空間的に言うと，空間の実践，空間の表象，表象の空間）」ルフェーヴル（2000）p. 85
52. 例えば「空間的実践（la pratique spatial）―知覚されるもの―」という表記に典型的に表れる。（南後（2006）p. 195）
53. ルフェーヴルは「社会空間」を理解するために「身体」を活用すべきだということを打ち出している。このことからも「空間」と「身体」の同一視は避け，「身体」を「空間」とは別個に扱ったうえで，「身体」との関係のもと「空間」を分析するヴィジョンが描けるだろう。「社会空間についての三つの契機（注：空間的実践（プラスチック），空間の表象，表象の空間）を理解するためには，身体を考察するのが手がかりとなる。集団や社会の成員である「主体」とその空間との関係は主体の自己自身の身体との関係をふくんでおり，またその逆についても言えるだけに，なおさらである。社会的実践（プラスチック）を総合的にとらえると，それは身体の利用を前提にしている。」ルフェーヴル（2000）p. 84
54. ルフェーヴル（2000）p. 245
55.「（社会）空間の総体は身体から生じてくる。空間は身体を変容させて身体を忘却するほどになり，また空間はみずからを身体から切り離して身体を殺害するほどになるのであるが，たとえそうであっても空間は身体から生じてくるのである。遠く離れた秩序の生成を説き明かしてくれるのは，われわれにとってもっとも身近な秩序である身体の秩序だけである。」ルフェーヴル（2000）p. 578

56.「身体とその空間との間には，空間における身体の展開とその空間の占拠との間には，直接の関係がある。（中略）それぞれの生きた身体が空間であり，みずからの空間をもつのである。身体は空間においてみずからを生産し，かつその空間を生産する。」ルフェーヴル（2000）p.259

57.「空間―わたしの空間―は，わたしがテクスト性を構築する状況なのではない。そうではなく，それはまずわたしの身体である。ついでそれは，わたしの身体の片割れ，あるいは私の身体の他者であり，鏡の像であり，影である。空間は，一方における私の身体に触れ，わたしの身体にしみこみ，わたしの身体を脅かしたり益したりするものと，他方における他のすべての身体との間の移ろいゆく交差点なのである。」ルフェーヴル（2000）p. 275

58.「空間的身体にとって，社会的になるということは，あらかじめ存在する「世界」に組み入れられるということではない。空間的身体は生産し，再生産する。この身体は，みずからが再生産し生産するものを感じとる。この身体は，自己の空間的属性と空間の規定要因をみずからのうちに宿している。」ルフェーヴル（2000）p. 294-295

59.「社会的身体とは，荒廃した実践―分業―と社会の要求によってうちのめされ，打ち砕かれた身体である。（中略）「社会化された」空間に組みこまれこの空間によってゆがめられた身体」。ルフェーヴル（2000）p. 289

60.「場所，時間，エネルギー消費の間の相互作用があるところにはどこにでもリズムがある。したがってそこにはa）（動き，身振り，行為，状況，差異の）反復，b）線形の過程と循環する過程との干渉，c）誕生，成長，ピーク，減退，死がある。」Lefebvre（2004）p. 15

61.「身体。わたしたちの身体。哲学においては無視されたが，最後には心中を語り出し大騒ぎする。生理学と医学にしか残されなかったもの。その身体こそが互いに異なるものの調和した複数のリズムの束を構成するのである。」Lefebvre（2004）p. 20

62.「改める必要があるのであるが，客観的に，ある社会集団・階級・カーストはある時代のリズムの刷り込みに干渉される。」Lefebvre（2004）p. 14

63.「抑圧的で圧政的な空間の実践は，時間を生産的労働の時間に縛りつけ，さらに生きられるリズムを衰弱させて，生きられるリズムを労働（分業労働）の合理化され限定された身ぶりによって定義する。」ルフェーヴル（2000）p. 582

64.「ある社会，集団，国家に入るということは（教え込まれる）価値を受け入れ，正しい手段に依存して交換を行うことを学ぶことであるが，それはまた，その方法に（自身を屈服させつつ）自身を屈服することでもある。これが調教である。人間は自らを動物のように訓練する。人間は自身を保持することを学ぶ。調教は呼吸，移動，セックスの及ぶ限り，どこまでもついてまわる。反復が調教の基礎である。（中略）ブリーダーは，革新と反復を交互に行うことで，線形と周期を組み合わせ，調和をもたらすことができる。命令と振る舞いの線形的な系は周期的に繰り返される。これが調教の段階である。線形的な系は（しばしば合図を伴い）始まりと終わりを持つ。周期の再開は指示や合図よりも時間の一般的な構成に従っている。そのために社会や文化次第ということになる。」Lefebvre（2004）p. 39

65. よく似た考え方は，フーコーの未完の著作である『性の歴史』にも見られる。「抵抗の点，その節目，その中心は，時間と空間の中に，程度の差はあれ，強度をもって散らばらされており，時として，集団あるいは個人を決定的な形で調教し，身体のある部分，生のある瞬間，行動のある形に火をつけるのだ。」フーコー，ミシェル（1986）『性の歴史Ⅰ　知への意志』新潮社，p. 124

66. Lefebvre（2004）p. 8

67.「時間と空間の反復のない，再開のない，回復のない，つまり尺度＝計測のないリズムはない。しかし無期限に完璧に同一の反復もない。そのため，反復と差異は関係するのだ。日常生活，しきたり，儀式，祝祭，規則，法に関して，差異という，いつも何か新しく見たことがないものが反復に持ち込まれるのだ。」Lefebvre（2004）p. 6

68.「身近であると同時に奥深い身体の秘密とは，「主体」と「客体」を超えて（そしてこの両者の哲学的な区別を超えて，）反復にもとづいて，すなわち（直線的・循環的）な身ぶりとリズムにもとづいて（無意識のうちに）差異を生産する能力にある。」ルフェーヴル（2000）p. 566。また，その能力のうちに欲望を構成することも指摘しているが，社会的に押しつけられたリズムから逃れるように新たなリズムを生み出す点で，ドゥルーズ＋ガタリの「ツリーとリゾーム」，「条里空間と平滑空間」などのタームで分析された欲望論との接合も可能はないだろうか。「身体のリズムはきわめて多面的にたがいに浸透しあう。身体の中で，身体を軸にしてさまざまなリズムが，水の表面と同じように，あるいは流動体の塊の内部と同じようにして，たがいに交差し，交錯し，重なり合い，そして常に空間に結び付けられている。（中略）これらのリズムは，欲求と結びついている。欲求はさまざまな傾向に分散させられたり，欲望へと純化されたりする。」ルフェーヴル（2000）p. 302

69.「空間の再領有と結びついた身体の再領有は，現実的であれ，ユートピア的であれ，今日のあらゆる革命的構想にとってその不可欠の一部をなしている。」ルフェーヴル（2000）p. 250-251。代表例としてやはりシチュアシオニストの実践を挙げるべきであろう。

70. この「環境」と「身体」の相互作用的なプロセスとして「空間」を捉える視点は吉見（1987）や加藤（2005）の空間の捉え方にも多くを依っている。吉見は「盛り場」という空間を出来事として捉え，都市施設は「舞台装置」として扱う。「「盛り場」は，施設の集合や特定の機能をもった地域としてある以前にまず，〈出来事〉としてあるのだ。そうした意味で「盛り場」は，商店街や繁華街といった語の系列よりもむしろたとえば，祭りとか，市とか，叛乱といった語の系列に属するものである。「盛り場」とは恒常的に多数の匿名的な人々が盛っていることであって，そうした「こと」を取り囲んでいる諸施設ではない。それらの諸施設はいわば舞台装置にすぎず，「盛り場」という〈出来事〉そのものではないのである。」吉見（1987），p. 24。また加藤は「花街」という空間を芸妓が営業し，営業を可能ならしめる置屋とサーヴィス業の集積地として捉える。花街とは「「芸妓」の所在（営業）する場所である。芸妓のいないところに花街は成立しない。しかし，ただ芸妓がいるだけなのか，といえばそうではない。芸妓の存在は，あくまで必要条件である。芸妓が営業するためには，芸妓を抱える置屋，そして芸妓が芸を披露して宴に花を添える料理屋，待合茶屋，貸席，旅館，その他の類する施設，そして場合によっては置屋と派遣先とを仲介する事務所――一般的には検番（券番・見番）と呼ばれる―が必要である。つまり，芸妓しかいないなどということは実際上ありえず，芸妓を抱える置屋と芸妓の派遣先となる特定のサーヴィス業がある程度集積して，初めて花街となるのだ。」加藤（2005），p. 6

71. しばしば「情報」をある種の書物（例えばマルクス『資本論』など），ある種の組織（共産主義諸派の運動体や平和運動団体など），ある種の地域（貧困地域，被差別地域など）などの「環境」から取得することで，「身体」の「リズム」・「ハビトゥス」に通常状態とはちがう規制をかけ，通常状態の「周期」・「ライフスタイル」に違和感を持つ場合などを指す。

72. 上述したパリ・コミューンはそのようにして作り出された社会構成体であろう。地域・時代において用語はまちまちであるが，このことを「政変」，「革命」，「まちづくり」などと呼ぶことがある。「直接行動」，「まちづくりは人づくり」，「主体性の獲得」，「自己批判」などの新旧さまざまな運動の言葉に表れるように，諸種の社会運動が身体的な用語を利用するのは，ある特定の「身体」が「身体」−「環境」間の不適合を是正し，新しい社会構成体を作り出す側面を強調するからであろう。

How Can We Describe Urban Space? : 'Voeur', 'Flaneur', or What?

Taku SUGANO

After the 'spatial turn' in the late 1980s, many spatial theories came out, but, few monographs or studies ('new geography of urban space') were published by applying these theories. The purpose of this research paper is to determine why 'new geography of urban space' is difficult and to have a view of the theory of 'new geography of urban space' to describe urban space.

I analyzed two 'new geographies of urban space', one is Harvey's and another is Soja's. Harvey's monograph of a city was written by applying the analysis of a capitalistic mode of production to a real city from the viewpoint of a 'macro voeur' and its main subject is the influence of capital on the everyday life of people. But this monograph doesn't have the framework to describe law, institutions, customs, resistances of people, and so on. Soja's monograph of cities was written from two viewpoints. One viewpoint as 'macro' is from capital as the drive of the production of a built environment and another as 'micro' is from the experience of the subject. But this monograph doesn't have the framework to interrelate 'macro' and 'micro'. From this analysis, we understood the need of a theory which links the viewpoint from 'macro voeur' as capital and a built environment with the viewpoint from 'micro flaneur' as the experience of the subject.

I think 'body' is worthy of remark as the mediation of 'macro' and 'micro'. I analyzed some theories which link 'body' with 'space'. In Bourdieu's theory, 'body' is the flesh materialized habitus which interfaces the social world with the actor. In Gibson's theory, 'space' is identified as the interacting process of 'environment' and 'body'. In Lefebvre's theory, we can understand that 'space' permeates from 'body' and that 'body' plays a part of the mediation of 'production of space' and 'organization of time' by somatization of 'rhythm'. From this analysis, I had a view of the theory of new geography of urban space by building 'body' as the mediation into 'spatial theory'. The theory is that 'space' was built up through the interacting process of 'body' and 'environment'.

Keyword : geography of urban space, space, body, production of space, spatial turn